<原 著>

明治期における広島県中学校の 校友会運動部について

鶴 岡 英 一

(昭和48年3月22日受付)

Athletic clubs of the Middle-Schools in the
Hiroshima prefecture in the Meiji Period.

Eiichi Tsuruoka

(Hiroshima University)

明治期における広島県中学校の運動部について上級学校との比較を念頭におきながらその特徴を考察した。その結果、校友会組織における運動部優位という現象やメジャー・スポーツが野球、端艇、柔剣道であったことなど、形式的にはかなりの類似点が認められたが、中学校運動部は学校当局によって準備された言わば上から与えられた組織であるという点に基本的相違が見出された。また学校当局は明治30年代前半までは運動部の育成を図るが、40年代にかけては規制へと態度を変えていき、さらに40年前前後に一般的であった運動競技批判の風潮は広島県中学校の運動部活動にも微妙な影響を与えていることが示された。

In this monograph, the present writer surveyed the athletic clubs belonging to the student association of the each middle school in Hiroshima prefecture in the Meiji Period, and considered the characteristics of them, having in mind the comparison between these and those of the Higher schools in general. Some of findings are as follows.

It is true that there was considerable similarity between those and others; that in both cases, the athletic clubs had the dominant position in the student association they belonged, and both of them, as their major sports, played such same kind of sports as base-ball, rowing, Judo and Kendo. Nevertheless, fundamental differences were there. The clubs of the middle schools were not voluntarily organized by the student themselves, but were organized and sponsored by the school authorities, and that was not the cases in the higher schools. And on the part of the school authorities, they had kept the policy to encourage and promote the athletic club activities until the early 30's of the Meiji, but after that they abandoned this policy and went to regulate them. Adding to this, a general trend critical to the athletic activities, which was prevalent in the several years at the end of the Meiji Period, subtly influenced the athletic club activities in the middle schools also in the Hiroshima prefecture.

(Eiichi Tsuruoka: "Athletic clubs of the Middle-School in the Hiroshima prefecture in the Meiji Period.", *Research Journal of Physical Education*, Vol. 18, No. 1, September 1973, pp. 9~22)

は じ め に

明治期の地方体育とくに地方スポーツの発展を考察しようとするばあい、いわゆる高等教育機関の役割は重要であり、その設立時期によって発展の様相が異なってくる。周知の通り明治期のスポーツは主として学生によって推進され、中央から地方へ、また上級学校から中学校へ伝播されていたのが一般的様相である。しかしながらより厳密には、明治期の各地方のスポーツの発展には、「上級学校先導型」および「中学校先駆型」とでも称すべき二つのタイプを見出すことができる。前者は上級学校が早くから発足して、スポーツ発展の中心的役割を果たしたばあいであり、後者は上級学校の設立が比較的遅く、初期のスポーツの発展の荷ない手がおもに中学校であったばあいである。広島県について言えば、師範学校は早くから発足してはいるものの、明治期における唯一の高等教育機関であった広島高等師範学校の創立が明治35年であるため、スポーツ発展の先駆的役割はおもに中学校が果している。

このような意味をもつ広島県中学校の運動部の活動について、ここでは次の諸点を中心に考察を進めたい。第一は、中学校校友会の性格と運動部の位置づけに関する問題である。具体的には中学校校友会は上級学校の模倣であると言われているが、両者の基本的相違は何であるのか。また学校当局は校友会に対してどのような態度をとったのか。さらには運動部優位という現象は中学校校友会にもみられるかどうか等の問題を取り上げたい。第二は、明治期の中学校運動部の実態に関する事柄である。主要な運動部はどのような事情から成立し、どのような特徴をもっていたのかということを検討の対象とする。第三には、明治期の中学生の運動競技に対してどのような考え方をいっていたのかということ課題としたい。これは運動競技批判の高まった明治40年前後を中心に、中学生のスポーツ観およびその背景などについての考察を試みる。

考察にあたっては各中学校の「校友会誌」を主要な資料とした。「校友会誌」はその性格から言ってスポーツの発展を必ずしも妥当に反映してい

るとは限らない。したがってスポーツ史の資料としては自ら限界があることは言うまでもないが、この限界をわきまえることによって、スポーツ史の考察にかなりの手がかりを与えてくれる性質のものである。

I 明治期の中学校

ここでとりあげる中学校は、明治32年の改正「中学校令」によって規定された学校に限定し、「実業学校令」や「高等女学校令」による学校は今回の考察の対象とはしない。これら諸学校を総称するばあいには「中等学校」と称して「中学校」とは区別する。

このような意味での中学校は、明治期の広島県においては次の諸校が開校されていた。公立学校は、広島県立広島中学校、広島県立福山中学校、広島県立忠海中学校、広島県立三次中学校、広島県立呉中学校および広島高等師範学校附属中学校の6校、私立学校は、修道中学校、日影館中学校、第四仏教中学校および広陵中学校の4校である。これら中学校の性格は、たとえば明治44年の小学校率業者、37,282名に対して中学校卒業者、658名という統計²²⁾が雄弁に語ってくれるであろう。つまり改正中学校令が規定する「男子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為ス」対象とは、きわめてかぎられた階層の子弟であったわけである。

なお上記中学校の中には、34年の「中学校令施行規則」の制定までにいく度か校名を変更している学校もあるが、本稿では原則として34年以降の校名を用いることにする。

II 校友会の設立とその性格

1. 校友会設立の経緯

校友会の設立事情は各学校の創立時期によって異なっている。主要学校の「校友会規則」⁹⁾²⁸⁾²⁹⁾⁴⁴⁾⁴⁶⁾の抜萃にみられるように、30年以降に創立された学校の多くは、学校創設後間もなく校友会を発足させている。これに対して30年以前の学校では、創立後かなりの時期を経ないと校友会の設立がみられず、校友会発足に至る曲折を思わせる。たとえば広島中学では27年に校友会の前身である「同窓会」を発足させているが、これは「広島中学の

表1 校友会の目的・組織

校名	学 校 の創立	校友会 の設立	目 的	役 員	組 織	会 費
広島中学校	明治 10年	明治 29年	本会は広島尋常中学校に関係あるもの 一致団結して互に相親睦し風紀を善美な らしむるを以て目的とす	会 長（校長） 部 長（生徒） 委 員（生徒） 世話係（生徒）	1. 文芸部談（談話会、 雑誌発行） 2. 運動部（ボート、ベ ースボール、撃剣等）	月額 五銭
福山中学校	明治 12年	明治 26年	本会ノ目的ハ心身ニ関スル諸技芸ヲ奨 励スルニアリ	会 長（校長） 理 事（職員） 部 長（職員） 委 員（生徒）	1. 文芸部（講談、雑誌 等） 2. 武技部（撃剣、柔道、 弓術等） 3. 遊技部（ボート、ベ ースボール、陸上運動 等）	月額 貳銭
忠海中学校	明治 30年	明治 31年	本会は聖旨を奉戴して徳性を涵養し智 識を研磨し筋骨を鍛錬し近くは同学の交 情を厚うし進て報国の志気を養ふを以て 目的とす	会 長（校長） 副会長（首席教 諭） 部 長（職員） 副部長（職員） 幹事長（生徒）	1. 雑 誌 部 2. 談 話 部 3. 端 艇 部 4. 球 芸 部 5. 剣 道 部 6. 柔 道 部 7. 事 務 部	月額 拾五銭
三次中学校	明治 30年	明治 32年	本会ハ地方特殊ノ美俗ヲ發揮シ在来纏 緋ノ情弊ヲ掃ヒ内ニ無前ノ校風ヲ養ヒ進 ンデ社会ノ開導ヲ追行セン事ヲ期ス	会 長 副会長 部 長 理 事	1. 文 芸 部 2. 武 技 部 3. 庶 務 部	月額 拾五銭
修道中学校	明治 38年	明治 41年	会員の風紀を厳肅にし、友誼を親厚に し其他学生たる本分を全うするを以て目 的とす	会 長（校長） 部 長（職員） 幹 事（生徒） 委 員（生徒）	1. 柔 道 部 2. 撃 剣 部 3. 端 艇 部 4. 庭 球 部 5. 野 球 部 6. 文 芸 部 7. 会 計 部	不 明
広島中学校 高師附属	明治 38年	明治 38年	本会ハ当校ノ教育ヲ助ケテ会員心身ノ 修養ニ資シ其交誼ヲ厚クシ兼ネテ校風ヲ 振作スルヲ以テ目的トス	総 裁（校長） 会 長（主事） 部 長（職員） 幹 事（職員） 委 員（生徒）	1. 学 芸 部 2. 運 動 部 3. 庶 務 部	月額 貳拾銭

注：広島中学校については校友会の前身「同窓会」の規則を記した。

設立以来殆んど十星霜なり未だ曾て全校生徒の一
致団結して一会を組織し一誌を発行せしを聞かず
且つ強固なる一種特別の校風なく生徒の共同の力
に乏しく只毎朝教場に集合し業を受けて退くのみ
夫の精神修養の如きは決して其影だに見る能はざ
りしなり……」¹⁵⁾ という事情から生徒の団結と心

身の練磨を目指して設立されたものであった。こ
の同窓会は日清戦争の勃発とこれにともなう大本
営の広島への移転等を契機として設けられたもの
であったが、何故か実質的活動は全くおこなわれ
ないままに、29年に改めて発会式をおこなってい
る。再発足した同窓会では会長以外の役員は全て

生徒がこれに当り、職員は関与していなかったことが注目される。このことが生徒自治の尊重と結びつくかどうかは疑問であるが、とにかく生徒が役員組織が前面に押し出されていることは他に例のないことであった。

しかしながらこの生徒中心の役員組織そのものが実は同窓会の改組問題を惹起したのである。34年、着任早々の宮本正貫校長は同窓会改組を手がけているが、その経緯について同校長自身は次のように述べている。「同窓会の目的たる会員一致して美風を起するにありと云ふは固より余か継成せんと欲する所なりと雖も其方法組織に於て就中其所謂美風を起すの会員たるべきもの 只会長たる校長と会員たる生徒とのみにして 其实他の職員は敢て関知せざるか如き看あるは彼の師弟の親昵、品性の陶冶、校規の実行、全校の団結の如き此等の点に於て多少の遺憾なきこと能はす……全校の同意を得て会則を変更し会名を改めて校友会と称し職員生徒挙って会員となり」¹¹⁾。つまりこの学校では職員関与の問題が機縁となって同窓会は校友会に改組されたのである。

ちなみにこの宮本校長は前任校の忠海中学において校友会を発足させているが、「聖旨を奉戴して徳性を涵養し……」という目的を校友会に掲げさせた同校長にとって、生徒中心の広島中学の同窓会は到底容認できないものであったにわがいない。一般に明治期の中学校校長は現在からみれば絶対的とも思えるほどの権限をもち、自己の教育理想の具体化を校友会活動に求めたものも少なくなかった。

ところで明治期の中学校校友会が上級学校のそれと基本的に異なるのは、校友会の発足が生徒の発意によるものではなくて、学校側によって準備された言わば上から与えられたものであったということにある。前述の広島中学にしてもこのことには変りはなく、であればこそ同窓会発足後二年間の空白があったのである。38年4月開校し同年10月は校友会を設置している広島高師附属中学のばあいも、「当時在学せるものは第一学年のみなれば諸般の事業、施設は全く職員の手によって行はれ」⁸⁰⁾ するという実情であった。

2. 校友会の目的・組織

これまでの検討から校友会の目的そのものも、生徒自らが求めた活動目標というよりは学校側の教育的期待から生じたものであることは自ら明らかであろう。各学校はそれぞれ独自の表現によって目的を掲げているが、要するに「心身の鍛錬」や「校風の発展」を校友会活動に求めていることは多くの学校に共通している。忠海中学校長の述べるように、「智徳体育の補助機関としての校友会」⁶⁴⁾ という認識が各学校に共通していたかどうかは別として、少なくとも「校友会は中等教育の裏面」¹²⁾ ということは広く理解されていたにちがいない。逆説的に言えば、校友会はいわゆる教場の授業だけでは処理し切れない教育上の諸問題に対応するものとして生まれたものであった。教育上の問題とはたとえば30年代にかけて頻発した学校紛擾であったりあるいは風紀の頹廃などであった。

それはともかく校友会と校風刷新について想起されるのは、20年代における特に高等学校を中心とした「運動部即校風」という風潮や30年代に生じた「校風論争」⁴¹⁾ であるが、中学校のばあいその内容においてかなり異なったものであったことに注意したい。校友会組織が運動部と文化部とに大別され、運動部は「柔道」「剣道」「端艇」「野球」などの諸部によって構成されていることは、上級学校の模倣を思わせる。しかしながら上級学校においては、自然発生的に生じたスポーツ・クラブやサークルを統轄する団体として「運動会」や校友会が組織されたのに対して、中学校では個々の運動部の実質的な活動がおこなわれていないばあいにも、発足当初の校友会組織にその運動部を掲げている学校が少なくない。つまり校友会は予め職員の手によって、あるべきものとして準備された組織であったのである。したがって発足当時の校友会には生徒の自治意識が生まれる余地はほとんどなく、「箴城自治」などに裏代けられて「運動部即校風」を生みだした上級学校と比較すると、基本的相違のあることを指摘せざるをえない。

3. 校友会活動と生徒の参加

「校友会規則」に生徒の参加を規定している学校は少ないが、たとえば忠海中学の規則には、端

艇部、球芸部、剣道部および柔道部をあげて、「右四部には各正員を置き通常会員は必ず右四部の一部の正員となり所定の日時に於て運動をなすべきものとす……」⁴⁷⁾ということがきめられている。これと対照的に福山中学のばあいには、「会員ハ随意ニ各部ノ技芸ヲ修ムルコトヲ得ルモノトス」⁴⁸⁾と規定している。忠海中学が校友会活動に全員参加を求め、しかも文化部を除いて運動部を指定していることは注目されてよい。たしかにこれは少なくとも形式的には、宮坂哲文の指摘する「運動競技活動の教育課程化」⁴²⁾であるかもしれない。しかしながら後述する30年代の運動部の実情や当時の運動施設・用具などを考え併せると、この「教育課程化」の実態にはかなりの疑問をいだかざるをえない。当時の忠海中学校の校友会誌は運動部の活況を伝えているがその反面、たとえば端艇部は「我部正員は百十八名あり之を毎週月火木土の四曜日に分ち四艇にて練習」⁵²⁾しなければならなかった状況が告げられ、また柔道部については、「橋高教師の去らるるに遇ひ遂に稽古を中止するの已むを得ざるに至りぬ……柔道部の衰退を悲ますんはあらず」⁵³⁾ということが述べられている。さらにまた、この校友会誌には「非運動家に一言す」⁴⁹⁾と題した作文が掲載されるなど、運動部への全員参加が実際には必ずしも期待通りにはおこなわれていなかったことを裏書きしている。当時すでに一学年の生徒数が百名を越えていたこの学校において、四運動部に全員参加を求めることにはかなりの無理があったのである。それかあらぬか42年の「改正校友会規則」⁶¹⁾では運動部への全員参加の条項は削除されている。

ところで「運動競技の教育課程化」ということで取りあげておきたいのは広島高師附属中学の事例である。同校沿革略史は次のように述べている。「39年6月5日より課外運動の制を設け、体操科正課授業の不足を補ひ、毎日放課後一時間宛職員監督の下に之を実施せり。この制による運動は、擊剣、庭球、野球、蹴球其の他の戸外遊戯なり。」⁵¹⁾そしてこの「課外運動」はその後種々変遷があったが、「多くは各学年毎週二回放課後一時間宛教官監督の下に」⁵²⁾継続され、42年には「科外運動を剣道柔道の二部に限り、之を準正科となし」⁵³⁾

ている。この学校がこのような制度を実施したのは上記引用にも示されているように、正課体育の不足という認識にもとづいたものであったが、同時に選手制度批判から生じたものでもあった。同校の体育に関する記録には、「……生徒悉く各種の運動を好みて其の一に耽ることなからしめ、所謂選手養成の傾向を防止する……」⁵⁴⁾と述べられている。この方針にもとづいて対外試合を禁止するという措置が大正3年までとられていた。

このような学校当局の方針は校友会活動にも影響を与えずにはおかない。この学校の校友会は39年に職員の手によって設けられたことはすでに述べた通りであるが、運動部は競技部、遊戯部、水泳部、武芸部および遠足部によって構成されていた。しかしながら発足当初のこの運動部というのは、「特別に部員を定めず休憩時間に随意運動場にて練習する」⁵⁵⁾という程度のものであった。そして同校の校友会沿革略史は、前記の「課外運動」について「学校の行事として行はれたるものにして校友会の事業と自ら別種のものなりしも校友会運動部各部の発達はこれに負ふところ多し」⁵⁶⁾と述べ、42年頃から各部が独立してようやく部活動を本格的に展開し始めたことを告げている。つまりこの学校の校友会は職員によって組織され、さらに学校当局の「課外運動」の制度に刺激されて運動部活動が活発化したわけである。なおこの学校においても文化部に対しては運動部に対するほどの配慮はなされていなかったことを忘れてはならない。

全員参加の運動競技ということについてはからずも二つの異なった事例を見出すことができた。これらのもつ問題の困難さや複雑さは現代に対しても示唆的である。しかしながら明治期の中学校においては上記二校を例外として、校友会各部への参加は任意制をとるのが一般的であった。せいぜい陸上運動会や水上運動会などの年中行事に全員参加がみられる程度である。

4. 校友会の予算

ここで校友会活動を裏付ける各校の予算および配分についてみておきたい。校友会予算に関心を示すのは、その配分の仕方が校友会各部の活動状況をかなり反映しているとみなすからにほかなら

ない。各校ともに職員および生徒から会費を徴収してこれを校友会の主な財源としているが、運動会などの行事についてはこの他に寄付金によってまかなっている学校も少なくない。

表2は忠海中学校校友会の34年度⁵⁴⁾、39年度⁵⁹⁾および44年度⁶³⁾の決算報告を表示したものである。表中の「区分」および総支出に対する「百分率」は筆者が便宜的に加えたものである。各年度によって比率は異なっているが共通していることは、運動部に対して多く、文化部に対しては少なく予算が配分されていることである。運動会などの行事費を併せて考えると、運動部関係の支出は全体の半ばを越えている。運動部の中では端艇部

が常に最も多額を占めていることが特徴的である。前述のようにこの学校では42年まで運動部への全員参加の立前をとっていたので、上記のことはあるいは当然とも受けとれるが、運動部への参加が任意制となった後でも、運動部の支出が高額を占めるという傾向には変りがない。

校友会予算における運動部優位、そして運動部のなかでは端艇部が高額を占めるという傾向は、他の学校にも共通している。これに対して文化部には、校友会誌の発行費がせいぜい認められていたのにすぎなかった。なお付言すれば、校友会費の経理は学校当局が一切おこなうのが普通であって、現在からみれば校友会活動とはみなしがたい

表2 校友会費の決算（忠海中学）

年度 区分	3 4	3 9	4 4
運 動 部	剣道部費 円銭厘 46,751	剣道部費 円銭厘 72,360	武術部費 円銭厘 164,014
	柔道部費 30,966	端艇部費 85,752	海上運動部費 207,981
	端艇部費 68,120	野球部費 65,495	陸上運動部費 207,630
	球芸部費 46,180		
	小計 192,017 (59.8)	小計 223,607 (31.0)	小計 579,625 (47.5)
文化 部	雑誌部費 55,560 (17.3)	雑誌部費 94,396 (13.1)	文芸部費 74,800 (6.1)
事務 部	事務部費 6,290 (2.0)	事務部費 6,560 (0.9)	経理部費 84,526 (6.9)
行 事	接待費 11,250 (3.5)	賞品費 29,320	運動会費 118,233
		接待費 38,737	選手慰労費 24,500
		小計 68,057 (9.4)	小計 142,733 (11.7)
そ の 他	補助費 37,270	報酬 30,072	予備費 48,330
	郵便電信運送費 2,475	郵便電信運送費 16,580	基金 46,500
	雑部費 10,518	備人費 9,190	端艇積立金 190,000
	予備費 5,380	雑費 47,295	試験用紙費 54,856
		宮繕費 75,000	
		準備費 69,600	
		基金 80,000	
	小計 55,643 (17.4)	小計 327,737 (54.9)	小計 339,686 (27.8)
	円銭 320,760	円銭 720,357	円銭 1,221,370
合 計			

注：（ ）は各年度の総支出に対する百分率

支出項目が散見されるのも、当時の校友会の性格を物語っているものといえよう。

Ⅲ 運動部の成立とその発展

前節において中学校校友会の性格とその中における運動部の位置づけをみてきたが、ここでは個々の運動部についてその成立事情ならびに初期の活動状況などを検討したい。

1. 端艇部

明治期の中学校運動部を特徴づけるものに端艇部がある。広島県では山間部に位置していた三次中学などを除いて、殆どどの中学校が端艇部を発足させているが、なかでも広島中学および忠海中学はとくに端艇部の活動が活発であった。

広島中学の端艇部は29年に発足しているが、その設立趣旨は次の通りである。「巖然東洋に屹立し旭旗翻へる茲に三千歳上に叙聖文武なる皇上陛下は連綿たる皇統を受け国をしろしめし給ひ嘗て外夷の侵略を受けず侮辱を蒙らざる金甌無欠の我邦は四面環らすに渺々たる海洋を以てす故に生を此土に受くる者須からく海事思想を養成し以て金甌無欠の邦を守り赫々たる旭旗をして無極に翻々たらしめ以て報国尽忠の義務を尽すべきなり我同窓会茲に感ありて一隻の練習艇を購ひ会員をして海事思想を養成せしめんとし茲に端艇部を設立せし所以なり」¹⁶⁾。そしてここに記されている練習艇は、「海軍のカッターのことで日清戦争の時、拿捕した軍艦鎮遠のものだという歴史的なもので、黄海、と名付けて十数名で乗りこんで瀬戸内の各地を漕ぎまわった」²⁰⁾といわれている。上記の引用は校友会誌の運動部記事にありがちな誇張を思わせる記述であるが、いずれにしても日清戦争を契機として決定的となっていた広島市の軍事都市の性格をその背後に感じとらせるものがある。たしかに軍事都市と中学生のスポーツ活動とを短絡させることは性急にすぎるが、たとえば、「セーラー服を制服とし…海軍に大もてであった」²¹⁾忠海中学が、校友会の発会式にボートレースをおこなって発足させた端艇部の例にもみられるように、当時の端艇部に単なるスポーツ以上のものが求められたとしても無理からぬ状況であったのである。

しかしながら発足当初の端艇部は「海事思想の養成」を標榜しながらも、その実態はカッターで瀬戸内海を漕ぎ廻る言わば舟遊びの域を出ないのであった。やがて各校で競漕艇（固定席）が建造されるようになると、従来の舟遊びはボートレースへと発展し、校内端艇大会が運動会とともに年中行事化してゆく。なかでも広島中学の校内大会は注目される。この学校は31年に第1回「水上運動会」を開催し、第2回からは招待レースをプログラムに組み込んでいるが、とくに34年には、「師範学校」「修道中学」「究数学院」「仏教中学」「明道中学」「職工学校」「幼年学校」「水上警察署」その他小学校4校が参加するという盛況であった。

この34、5年頃は広島の漕艇界にとって画期的な時期であった。武徳会主催第一回端艇競漕会への師範学校クルーの参加、第一回広島短艇競漕会の開催、忠海中学の校内競艇会の開始、さらには各校校友会誌における端艇部記事の増大などボートレースの活況が伝えられる時期である。そして卒業生による漕艇技術の紹介⁴⁹⁾⁵⁵⁾が校友会誌に掲載されるなど、技術的にもようやく舟遊びの段階を脱してきたのである。この時期から各校では新艇の建造やボート繋留所の建設が盛んになり、たとえば忠海中学は39年には7隻のボートを保持していた。

40年代の各校端艇部は、従来の校内大会開催よりも対校レース、とりわけ琵琶湖の端艇大会に眼を向けるようになる。これは同大会における広島師範の連続優勝や広島中学の参加などによって県下中学校のボート熱が一層刺激されたためである。

広島県中学校における端艇の発達には、カッターによる舟遊び——校内大会——校内大会と対校レースの共存——対校レース、という経路を辿ってきた。明治期の上級学校においてメジャー・スポーツであった端艇が中学校にも影響を与えたことは容易に想像されようが、同時に軍事都市という環境や瀬戸内海に面し多くの河川の流れる自然環境の影響も見逃せない。

なおつけ加えるならば、校友会規則にもまた校友会誌においても、ボートについて「端艇」およ

び「短艇」の双方の用語が使われているが、その使い方は恣意的であって、宮田勝善の指摘⁴³⁾するような区別は見当らない。

2. 野球部

明治初年にわが国に導入された野球が端艇とともに上級学校のスポーツの主流をなしていたことは周知の通りであるが、中学校のばあいものがあてはまる。広島県において何時頃から野球がおこなわれたかは不明であるが、野球が多少とも組織的におこなわれるようになったのは20年代である。広島中学では22, 3年頃から「グローブも用ひず捕手もバウンドキャッチをおこなふ」²⁷⁾ 野球が始められ、25年には「野球会」が生まれているが、この間の事情を「野球部報」は次のように説明している。「武拾五年に至り時の県参事官佃一予氏頗る此技を奨励し加ふるに教諭吉田彦松氏の熱心なる尽力空しからずして十月に至り全校を通じて野球会なるもの組織せられ……此頃師範学校には矢ヶ崎氏片田氏等の諸教諭ありて又此の技を奨励するあり武拾五年佃氏他に転任せんとするに際し大に技を師範学校と競ふ……」¹⁷⁾ これが記録に残っている広島中学の最初の対外試合である。しかし発足当初のこの組織は定着していたわけではなく、かなり流動的であった。すなわち、「明武拾六年七月に至り学年試験の結果我校の選手の大半校を辞し舎生の其跡を継ぐもの多し武拾七年に至り野球未だ衰へず武拾八年三月事に依りて舎生悉く退舎するに及んで漸く衰運に傾けり加ふるに時の校長加藤彰廉氏教長松井喜三郎氏小川教諭徳永佐助氏等大にクリケット及ローンテニス等の諸技を勉むるあり野球漸く衰へ校中復に野球を言ふものなし」¹⁸⁾ という状況が続く。これらの記述は初期の運動部の組織状況を伝えて興味深い。この当時の広島中学では教師のスポーツに対する好みによって運動部の活動が左右されたのである。

一方、32年に野球部を発足させた三次中学のばいはいは、「……野球あり昨春以来我校一部の間に起りしが、時恰かも波多静一の来り学ぶあり校内幾多の健児を駆りて専ら之れが奨励に力む。次て高橋享三あり京都同志社より来りて寄宿舎に入り寄宿舎生の一部を鼓し此技の習練を力めしかば、野

球は俄に勃興し」⁴⁰⁾ 野球部結成に至るという事情であった。この学校では関西からの転校生たちが野球部発足の原動力となっており、広島中学のばあいと対照的である。なお上記引用にみられるよう、両校野球部結成の中心的役割を果たしたのは寄宿舎生であった。寄宿舎生は野球部にかぎらず各運動部の発展に良かれ悪しかれ様々なかかわりをもっているが、今回は問題の所在の指摘にとどめておきたい。

一般的に言って野球の対校試合は30年代の半ば頃から活況を呈してくる。この対校試合のきっかけとして修学旅行が一つの役割を果たしていたことは興味深い。たとえば広島中学は33年の高松方面の修学旅行の途中、高松中学と野球試合をおこなっているが¹⁹⁾、このような例は他校においても少なくなく、修学旅行にともなうスポーツ試合は一種の流行でさえあった。野球部の活動は他の運動部に比べて試合数の多いことが特徴である。明治期の中学校の試合地域は、近県の岡山、山口、香川および愛媛の諸県に及んでいた。

発足当初の野球部が教師のかかわり方によって消長する例を広島中学にみてきたが、実は明治年間を通じて野球部ほど盛衰がはげしく、また多くの問題をかかえていた運動部も少ない。それはたとえば、広島中学と師範学校との試合における審判の判定をめぐる「鉄拳空を舞ふの修羅場を現出する」²⁰⁾ といったトラブルであったり、選手の成績不振による試合出場停止であったり、さらにはあからさまには理由を明らかにしない「なさけない事情」⁴⁾ による対外試合の禁止などであった。この点校友会誌や教務日誌は勝手なもので、対校試合の勝利などについては誇らしげに報告を記載するが、運動部にとって不名誉なことには触れようとしないのが通例である。それはともかく多くの学校において期間の長短は別としても、野球試合禁止の措置が幾度かとられているのが一般的状況であった。

30年代後半から40年代にかけての校友会誌には野球に対する賛否両論が掲載されて中央の動向をそのまま反映している。野球批判論はたとえば福山中学校校友会誌が取り上げている「野球技に付て敢て諸君に告ぐ」⁸⁾ などに典型的にみられ、こ

れに対して野球愛好者による野球擁護論は、野球の良さを情熱的に訴えてはいるが、説得力に欠けるものが多い。それらのなかで広島中学卒業生が特別寄稿した「野球論」¹⁴⁾は、野球の墮落した根源は、私学経営に根ざした早慶両校野球部のプロ化およびアメリカ化にあり、この墮落を救うものは日本的野球をおこなってきた一高野球団のゆき方にあるという主張をしている。これがどの程度の影響を与えたかは別として、明治後半の中学松野球部は、「早慶型野球」と「一高型野球」の両極の間をさまよいつつ問題を残したまま大正期へ引きつがれてゆく。

3. 柔道部・剣道部

柔道および剣道が中学校において運動部として成立する経過は他のスポーツのばあいとはかなり事情が異なっている。これらが在来武術であったという点で他のスポーツとは異質なものであることは言うまでもないが、明治年間を通じて展開された武術再興論とその具体化の一つと思われる武道の正課採用への動向を、その背景として考えないわけにはいかない。周知のように17年の体操伝習所の答申に始まる武道正課採用問題は、度重なる帝国議会への建議等を経て、44年の「中学校令施行規則」の改正に至る一連の動きであった。そして明治初年には衰退を余儀なくされていた在来の武術が、西南の役や日清戦争を経るにしたがって、中学校以上の学校における体育というよりはむしろ重要な訓育の手段にまで高められていった事実を見逃すことはできない。

したがって柔道および剣道は運動部として組織される以前に、学校当局による特別な配慮や準正課的取り扱いがなされたばあいが少なくない。この傾向は藩校の流れをくむ中学校ではとくに目立っている。たとえば福山藩の誠之館を継承する福山誠之館中学では12年に剣道を採用しているし、また浅野藩に起源をもつ修道学校の発足当初(20年)の学科課程表⁴⁵⁾には体操の内容として「柔道」があげられている。

明治27年の「尋常中学校の学科及其程度」の改正にともない体操の時間が減少しているが、その理由として「現在各学校で課外に随意の体操法を用ひているので、正課体操を減じてもその要を欠

かない」ということがあげられている。この文部当局の課外体育に対する認識は必ずしも誇張ではなく、この「課外の随意の体操法」のなかでとくに柔剣道が重規されたのが、明治期後半にかけての一般的状況であった。その典型的な例が広島高師附属中学であり、前述の通りこの学校では発足の翌年に設けた「課外運動」の制度を42年には、柔道および剣道に限定するよう改正している。

この柔剣道の重視は各学校における武術教師の任用にも示されている。たとえば忠海中学では校友会各部の部長副部長は職員があたることになっていたが、武術部に関しては「武術教師に其事を執らしむることを得」⁵⁰⁾と例外を設け、また校友会予算にも「武道指南報酬金」⁵¹⁾が計上されていた。他の学校においても何等かの形で武術教師を任用することが当時の通例であった。この武術教師がどのような経歴をもち、どのような経緯から中学校において武術指導をおこなうようになったのか、さらには学校当局は彼らをどのように受け入れたのか等の問題は、明治期の柔剣道部を理解するためには欠かせない事柄であるが今後の課題としたい。ともあれ武道の正課採用という観点からみるならば、現実には44年に向けて着々と布石がなされていたのである。

上述のような背景のもとに各学校の柔剣道部はかなり早い時期に、多くのばあい校友会創設当初から発足している。柔剣道部の活動で特徴的なことは対校試合はほとんどみられず、校内大会に重点がおかれていたことである。そしてごく限られた少数のものが京都の武道会の大会に出場するというのが実情であった。広島の中学校のばあいこの大会への参加は34、5年頃に始まっている。また30年代末から40年代にかけて各学校では寒稽古が開始されている。

しかしながら武術教師の任用などにみられる学校当局の柔剣道の重視は、上から与えられた運動部という性格を生み出していることも否定できない。極端なばあいには武術教師が不在であれば部活動が直ちに停止するという事態を招いている。各学校ともに武術教師の転任や辞任にともなって、一時的に部活動が停滞したり衰退することが少なくなかった。つまり柔道部は他の運動部にく

らべて教師への依存度がきわめて高かったのである。

4. その他

上記運動部の他に明治期に発足したものには、庭球部、蹴球部、相撲部などがあるが、いずれもマイナー・スポーツの域を出ないものであった。30年半ば頃からいくつかの学校で発足しそれなりに活況を示した庭球部も、当初は「……テニスは何んなるものぞ。元来女子運動に……極て温隠なる。極めて緩慢なる、自ら槽心を和気温容に導くものにして、是又弱体者は措て知らず、活発にして気敏を尚ぶ青年の、成して以て甘んず可き運動にあらず」²⁾ という非難を浴びなければならなかった。また明治末期に生まれた蹴球部も未だ萌芽的段階にあった。

IV 運 動 会

校友会運動部の考察が当面の課題であるから、運動会を取り上げることはあるいは当をえないかもしれない。しかし運動会は、大正期における徒歩部あるいは陸上競技部の前史的意味において、また各学校の校友会活動の象徴という点からも、さらには学校体育変遷の一つの指標とみなされる

ことから、是非ここで触れておきたい。

中学校の運動会は校友会設立後直ちに年中行事としておこなうようになった学校が多いので、その年代は広島県のばあいには30年代に始まっている。各学校の「校友会規則」や予算には運動会が校友会の主要行事であり同時に学校の年中行事であったことが示されている。そして多くの学校は創立記念日や校友会発足記念日に運動会を開催するのが通例であった。

明治期の運動会の状況を比較的良好にわれわれに伝えてくれるのはプログラムである。表3は忠海中学の運動会のうち、明治32年²¹⁾、36年⁵⁰⁾および40年⁶⁰⁾におこなわれたものについてその種目を分類して示したものである。数量的表示によらずとも、初期の「競争遊戯」中心の運動会が、「競技的」性格へ変りつつあることが明らであろう。とくに40年の運動会は実演種目に瑞典式体操、兵式体操、棍棒体操などが新しく加えられ、従来の即興的祭典から体育的運動会への転換がはっきりと示されている。また従来、すべて「競争」に一括されていた種目が、「競走」と「競争」とに区別して用いられるようになるのもこの時期からである。このような傾向はひとり忠海中学にとどまら

表 3 運動会の演技種目(忠海中学)

分類 開催年	競技的種目	競 争 遊 戯 的 種 目	球戯的種目	実演的種目
明治 32 年	障 害 物 競 争 各 級 選 拔 競 走	提灯競争, 竹馬競争, 二人三脚競争, 蠟燭競争, 盲競争, 片脚競争, 縄飛競争, 綱引, 兎飛競争, 旗取競争, 数学競争, サックレース, 武装競争, 職員競争, 来賓競争	スプーン競争	角 力
明 治 36 年	速駈競争(二百, 四百, 六百メー トル) 来賓速駈競争 各級責任競争	提灯競争, 戴囊競争, 二人三脚競争, 綱飛競争, 旗取競争, 障害物競争, 蠟燭競争, バケツ競争, 一人一脚, サックレース, 人馬競争, 千島競争, 来賓青年飛入競争	玉拾競争 スプーン競争	角 力
明 治 40 年	二百米突競走 四百米突競走 選 手 競 走 職 員 競 走 来 賓 競 走 小学校選手競走	二人三脚, 戴囊競走, 一人一脚, 関所越, 日英同盟, 押合引合, 提灯競争, 封状競争, 忠海の月, 襲撃, 千島競争, 障害物競走, アニビルコーラス, 人馬競走, サックレース, 豊年	キャプテンボール, スプーン競走, 玉拾競走, ライダーボール, センターボール	瑞典式体操 兵式体操 棍棒体操 擬 戦 二人球等(体操)

ず、一般に広島県の中学校においては、30年代末から40年代にかけて運動会の顕著な移り変りが認められる。

ところで校友会誌にはかなり早い時期から生徒の運動会批判が載せられている。すでに33年に福山中学の生徒は、「京都大学に於て挙行されたる運動会は嚴重にして我帝国諸学校の模範たることを知る依て又本校に於て地方小学校の模範となる盛大厳肅な運動会の挙行せられんことを望み……」¹⁾と述べ、また同校に35年まで在学した一卒業生は、「……其の頃の運動会が非常に華美に流れ、余興が甚だしく輕薄に陥っていることを慨歎して其の肅正を熱心に主張したり、一度は運動会のクラス選手競走のことからストライキが勃興し……」²⁾と語っている。さらにまた忠海中学校生徒も37年当時の運動会を批判して、「……中にも希望者の最も多きは提灯及びスプーン玉拾の如き女子的の運動にしてしかも十中八九を占め活気ある健男子のなすべき障害物、飛越、徒歩人馬の如きは甚だ稀にして……あはれ吾人青年廿世紀の新舞台に立ち優勝劣敗の競争場裏に於て能く効績を奏せずばあるべからざるものの其の運動其の競争に至りて斯くの如く個人的、柔弱なるはかえすがえすも遺憾なりき……」³⁾と述べている。つまり年に一度のお祭り騒ぎという運動会の姿は生徒自身からも批判されてくるのである。

一方、教師の側からも運動会批判は高まってゆく。38年の教育雑誌「芸備教育」は「運動会に就きて」⁴⁾という記事を掲載し、運動会の弊害として、1) 空騒ぎの過大に失すること、2) 運動競技の選択を誤ること、3) 訓練の絶無なること、をあげ運動会のあり方を論じている。その後40年代にかけて運動会問題はいく度か取り上げられ、「体操教授法連合研究会」(42年)⁵⁾においても議題となっている。また広島中学の広瀬松長は41年3月の教務報告の中で、「従来水陸の運動会はその装飾を盛にして、余興の動作を多くし、その賞品も物品を以てすること世間一般の風習なりしも、女子、小児のこととしてはともかく、高潔勇壮の大丈夫の氣象を養ふべき本校の運動会としては、その目的に副はざるの嫌あるを以て、煩雜なる無用の装飾と、物品賞与の法とを廃し、且つ競技者の

落伍を戒め、勝負の数に関せず、必ずその終りまでつくさしむることとせり」⁶⁾と運動会の改善を告げている。このように即興的年中行事は教師の側からも厳しく批判されて規制が強められていくのである。

ここで明治期の中学校運動会について付言しておきたいのは、小学校選手の招待競走である。これはあたかも上級学校が中等学校のスポーツ大会を主催したのに似て、各中学校は運動会のプログラムに小学生の競走を組み込んでいる。なかでも忠海中学のばあいには早くから小学生を招待していたが、38年には「優勝旗競走規定」⁷⁾を設けて小学生競走の組織化を図っている。そして参加校は20校近くにも及び、その参加選手の記録、身長、体重までも校友会誌に掲載するという徹底振りを示した。忠海中学ほどではなくとも各中学校には同様の企画がみられ、このことが一つには当時の中学校と地域社会との数少ない結びつきの機会となっていたのである。

V 校友会誌にみられる運動競技論

校友会誌には運動部記事の他に生徒や卒業生による運動競技論が少なからずみられる。一般的に言えば「文武両道」や「三育主義」の立場からの記述が多く、また、「健全なる精神は健全なる身体に宿る」あるいは「ワートルローの戦勝はイトンの運動場にあり」という句の引用が半ば定型化されている。これらのなかで当時の中学生のスポーツ観をかなり興味深く伝えてくれるのは野球に対する賛否両論である。

野球批判は35年頃に始まっている。先に引用した福山中学校校友会誌の「野球技に付て敢て諸君に告ぐ」⁸⁾はおそらく卒業生の投稿かと思われるが、当時の野球批判論の典型的なものとして注目される。まず野球の一般的状況について、「近来ベースボールも、之れを全国より大観すると、衰運の傾きはあるけれども、なほ運動界の雄将として、評し得らるる丈けそれだけ隆ん……」と説明し、野球の弊害について、「時間の消費」「負傷の危険」「金銭の消費」を指摘する。そして最後に対校試合に関しては、「……勝敗だの、復讐だの、名誉だの、汚辱だのと擾ぐ……学校は体育養成所

ではない、ベースボール術の練習所でもない」と批判している。

ここで問題とされている対校試合についての選手自身の考えは、たとえば、「校風が選手に負ふ処大なるは言ふ迄もなく、従って選手の責任や又重大である。夫れ対校の試合と言へば、校風と校風との競争であるから、選手たるもの技倆以外にも亦堂々たる所がなくはならぬ……一校を代表して起つ選手は、実に自校の名の為に奮戦する」⁶²⁾ というようなものであった。したがって試合に敗けることは「会稽の恥辱」であり「臥薪嘗胆」して雪辱を期さねばならなかったのである。これらはとくに30年代前半の運動部記事には繰り返えし引用される常用語であった。たしかに校長以下全校生徒に見送られて対校試合に出かけた時期の運動選手の心境には上記の如きものがあったにちがいない。しかしながら30年代後半の選手制度批判の高まりと共にこれらも変質を余儀なくされてくる。

40年掲載の「競技運動論」⁶⁾は選手制度を取りあげて、「競技運動に供ふものは選手制度なり。一校一団体の俊秀を抜きて、一校一団体の名声を其双肩に繋らしむ。勝つ事を好み、敗くる事を惜むが人の性なる以上は選手制度は免れ難たかる可し。選手は一校の花なり、良選手は独り其人の名誉たるのみならず、其学校の名誉なり」と主張しているが、「選手制度の為に一般的運動の妨げらるるは近時の通弊なり。グラウンドは選手に横領せられ、コートは選手に独占せらるると謂ふが如き嘆声は屢々耳にする」とこの制度の弊害にも気付いている。しかしながらその弊害の是正については、「弊ありと云ふを以て、凡て選手制度を排斥せんとするものあり、思はざるも甚だしきものと云ふべし。選手制度起りて競技の真髄は解せられ、競技運動の効果最も挙がる。選手制度を廃し対外の競争を止めたらんには、一般の運動思想は萎微し、活気は沈滞して、運動の本義を遂行する能はざるの結果となる如し」と述べるにとどまっている。つまり選手制度の矛盾を感じとりながらも、なおかつこの制度の存続を主張しているのである。

40年代にかけての選手制度批判は具体的には野

球部に集中される。「野球と徳義」⁷⁾はこの点にふれて、「近来何処を問はず各中学校に於て、野球家を排斥する傾向あるは、何がためぞ……特に野球家の如く、観客堵の如き中にて、花々しき「プレー」をなすものは、人の注意を引くこと多きを以て、些少たる不良の行為あるも、直ちに、野球家は性格良しからずとか、墮落せりとか、非難せらるるは、勢ひ止むを得ざることにして、決して決して野球家のみ墮落せるにあらず。これは近代学生一般の弊風として免るべからざる所なり……」と野球家を弁護するが、同時に米国の野球選手との比較から、「我が国の運動家は、誠に不規則な生活である。睡眠の不足位のことは結構なことで、随分暴飲暴食することもあるし、喫煙をやるといふ様な弊風がある。従って高潔な野球の価値を下げるのである」と野球選手ないし運動家の実態を告げている。

上記引用にも触れられている学生の風紀は日露戦争後はとくにかなり頹廢したものであって、福山中学校生徒の言葉を借りるならば次のようなものであった。「優柔不断な、婦女子の腐ったやうな者や、気取った雷同的の主義のない者や、流行を追ふ生ハイカラが殖えて来た。一寸した例が見給へ、近来非常にカラーを付けることが伝播して、一年級の小さい三尺余の子まで、白い端を出して嬉しがっている。勿論カラーを付けることは衛生上や経済上に有益なそうな、決してわるいことではない。けれども一二年の昔と比べると、ひどい流行だ。否学生社会が長足一否長襟の進歩をした故であらう」⁸⁾。この記述は当時の学生風俗を伝えて興味深い。

選手制度あるいは運動競技批判にさらされながら、運動愛好家たちは運動競技の拠りどころを模索する。「運動界漫言」⁹⁾と題する年の記事は、イギリス・スポーツに対する共鳴を示している。これは「英国で学んだ菊池博士の『運動の趣旨』」を紹介したものであるが、「運動によって養成せられる気象」として、「マンリネス」、「ブラック」、「ウェア・プレー」、「マグナニミチー」および「オーダー」をあげ、この生徒自身はこれらを、「男児らしき行動」、「不撓不屈の精神」、「公明正大の動作」、「寛裕快活の気象」および「秩序を尚ぶの

慣性」と理解している。イギリス・スポーツの紹介について言えば、36年の広島中学における講演「下田文学博士欧米教育視察談」¹³⁾においても言及されている。いずれにしても、フェア・プレーという用語とともにイギリス・スポーツが云々されるのは、広島県の中学校においては30年代の後半からである。

現治期の校友会誌にあらわれた運動競技論は、40年代にかけて一般的となった運動競技批判を断片的であるが反映し、渦中に立たされた運動愛好家たちの苦悩をわれわれに伝えてくれる。しかしながら全般的に言えば、叙述は平面的であり内容に乏しく、社会問題化したスポーツに対して戸迷いを示すという程度にとどまっている。それ以上を当時の中学生に求めるのはあるいは無理なことかもしれない。

む す び

明治後半において活動が展開された広島県中学校の校友会運動部は、形式において上級学校のそれときわめて類似しながらも、その内容はかなり異質のものであった。それは上から与えられた校友会であり運動部であるという性格のものであった。学校当局は当初は運動部の育成を図りながらもやがて40年代にかけて、規制へと態度を変えていった。その背景となった全国的な運動競技批判の風潮は広島県中学校の運動部活動にも微妙な影響を与えた。以上のことが広島県に独自のものであったかどうかについては、各県の地方体育史研究との比較をまたねばならないが、今後の課題としたい。

(本稿の一部は広島県体育史研究会会報2号に報告した)

文 献

- 1) 福山中学校校友会誌「誠之」, 3: 52, 1900.
- 2) 同上, 4: 84, 1902.
- 3) 同上, 5: 1-5, 1902.
- 4) 同上, 7: 86, 1903.
- 5) 同上, 12: 50-56, 1906.
- 6) 同上, 13: 1-10, 1907.
- 7) 同上, 13: 36-41, 1907.
- 8) 同上, 13: 20-21, 1907.
- 9) 福山尋常中学校校友会誌「福山校友会雑誌」, 1: 45-46, 1893.
- 10) 同上, 1: 46, 1893.
- 11) 広島中学校校友会誌「鯉城」, 8: 2, 1902.
- 12) 同上, 8: 2, 1902.
- 13) 同上, 11: 54-59, 1903.
- 14) 同上, 21: 1-6, 1912.
- 15) 広島尋常中学校同窓会誌「鯉城」, 1: 1, 1897.
- 16) 同上, 1: 59, 1897.
- 17) 同上, 1: 57, 1897.
- 18) 同上, 1: 58, 1897.
- 19) 広島県第一中学校同窓会誌「鯉城」, 6: 40-41, 1901.
- 20) 広島県第一尋常中学校同窓会誌「鯉城」, 2: 68, 1897.
- 21) 広島県第四中学校校友会誌「同遊」, 2: 90, 1900.
- 22) 広島県教育委員会, 広島県教育八十年誌, 同委員会, 1954. pp. 178-83.
- 23) 同上, p. 80.
- 24) 広島県私立教育会機関誌「芸備教育」, 18: 3-4, 1905.
- 25) 同上, 64: 8, 1909.
- 26) 広島国泰寺高等学校校友会誌「鯉城」, 創立80周年記念号: 15, 1959.
- 27) 同上, 14, 1959.
- 28) 同上, 123, 1959.
- 29) 広島高等師範学校附属中学校, 広島高等師範学校附属中学校二十五年史, 同校, 1930. Ⅰ. pp. 1-3.
- 30) 同上, Ⅰ. p. 1.
- 31) 同上, Ⅰ. p. 3.
- 32) 同上, Ⅰ. p. 130.
- 33) 同上, Ⅰ. p. 6.
- 34) 同上, Ⅰ. p. 129.
- 35) 同上, Ⅰ. p. 18.
- 36) 同上, Ⅰ. p. 35.
- 37) 数田猛雄, 広島県中等教育百年の回顧, 同刊行会, 1963. p. 129.
- 38) 同上, p. 145.
- 39) 三次中学校校友会誌「巴峽」, 1: 69-71, 1900.
- 40) 同上, 1: 75-76, 1900.
- 41) 宮坂哲文, 新訂特別教育活動—その歴史と理論, 明治図書, 1959. pp. 112-20.
- 42) 同上, pp. 120-22.
- 43) 宮田勝善, 改訂増補ボート百年, 時事通信社, 1970. pp. 94-97.

- 44) 修道学園, 修道学園史, 同学園, 1956. p.128.
- 45) 同上, p.80.
- 46) 忠海中学校校友会誌「同遊」, 4:112-13, 1902.
- 47) 同上, 4:112, 1902.
- 48) 同上, 4:42-44, 1902.
- 49) 同上, 4:18-22, 1902.
- 50) 同上, 4:113, 1902.
- 51) 同上, 4:108, 1902.
- 52) 同上, 5:80, 1903.
- 53) 同上, 5:84, 1903.
- 54) 同上, 5:89-90, 1903.
- 55) 同上, 5:2-4, 1903.
- 56) 同上, 6:51-54, 1904.
- 57) 同上, 6:28, 1904.
- 58) 同上, 11:79, 1906.
- 59) 同上, 12:85, 1907.
- 60) 同上, 13:64-65, 1907.
- 61) 同上, 15:91, 1909.
- 62) 同上, 15:63, 1909.
- 63) 同上, 19:81-82, 1913.
- 64) 豊田尋常中学校校友会誌「同遊」, 1:3, 1899.